

中国社会学の軌跡

——受容と廃学、そして恢復——

福 永 安 祥

1985年4月1日より5日まで、武漢市において、「社会学と社会改革」の理論討論会が召開されて、席上、参加者は、社会学の発展に共同の関心を示し、新しい挑戦に臨んで、如何に改革問題に適応するかが論議された。社会学が、1979年に恢復して6か年が経過して、全中国においては、数百名の教員が社会学を教授し、18の地方社会学会と、20の社会学研究所（社会学系大学院と研究室）、30か所の高等教育機関が社会学課程を開設し、30冊の翻訳・編著の社会学専門書が出版され、すでに5種の専門雑誌、2種の機関紙が刊行されて、国内外に一定の影響を与えつつある。しかし、同時に、中国の社会学は、今日までに、自己の学問体系を建立するにいたらず、高水準の社会学論著と教材に欠如し、現実問題の解決に敏感ではなく、素質のある社会学研究者を多数、養成するに至っていないことが指摘される。今日「中国社会学は、その恢復段階から、新たな歴史段階に入りつつある⁽¹⁾」ものと考えられており、その発展を期待するとともに、受容と廃学、そして恢復の軌跡を検討したいと思う。

社会学の史的発展過程を検討するに際しては、この学問の歴史的経過を追求するとともに、社会学の発端、成立及び発展の経緯を明らかにし、その各々の期間における社会学の特質と、社会学者の業績を解明することが求められる。中国の社会学の歴史的経緯について、第2次大戦後の主要なものに、費孝通、孫以芳、龍冠

海、楊懋春、黄昭倫、蔡勇美、イギリスのモーリス・フリードマンの業績があり、わが国においても、福武直の論文と、日中社会学会の若い世代の田辺義明たちの研究などが発表されている。また、中国社会学の研究段階の区分基準についても、費孝通、龍冠海、黄昭倫、蔡勇美がそれぞれに所説を発表している。

中国社会学の発展

氏名	費孝通	龍冠海	黄昭倫	蔡勇美
第一期	「羣学肄言」から五四運動(1903～19)	胚胎時期(1891～1911)	接納階段、譯著(1897～1910)	翻譯国外名著期(1897～1911)
第二期	教会学校、教会大学の社会学(1920～30)	發育時期(1912～31)	幼年阶段米国教会社会学(1910～30)	西方教会壟断期(1912～)
第三期	「理論研究」から「社区研究」(1930～48)	成長時期(1932～48)	成年阶段走向中国化(1930～48)	社会学中国化期
				社会学者三途徑發展

1949年以前における中国社会学が、大略三つの段階を以って区分されること、外国社会学書の翻訳、米国系教会大学の社会学、社会学の中国化、に分れることには意見が概ね一致する。しかし、(1)社会学の発端（1891年か、97年か、1903年か）、(2)中国社会学史との関連（五四運動、

「社会史論戦」など), (3) 社会学と社会主義路線, とについては, 意見が分れる。

1

日本の社会学は, ハーバート・スペンサーの受容に始まっているが, 中国においても, 嚴復⁽²⁾ (1853—1921) によるスペンサーの翻訳書の紹介が重要な発端をなしている。「社会学は, 中国においては, 初期には舶来品であって, 伝統的学術のなかから自ら発展した結果のものではなかった」〔費孝通 1948年〕のである。これは中国は, 「人倫関係を重視する文化」を伝来してきたために, この関係を維持するためには, 制裁力のある教条の權威を必要とし, そこでは, 懷疑的態度も, 社会関係に対する理性的検討も不可能であり, ただ, 慣習と感情が存在したにすぎないと, 説明されている。

19世紀の中国は, 清朝の執政下にあり, アヘン戦争 (1840年) 以後の半植民地的状況の下で, 知識人は固有の伝統文化を懷疑して信心を失い, 国外に向かって学習を始め, 張之洞 (1837—1909) のいう「中学 (中国の固有文化) を主体とし, 西学 (西洋の文化) を実用する」という風潮を生じた。中国の社会学は, 海外留学の知識人により移植され, 日本への留学生—とくに日清戦争 (1894—95年) 以後に増加—を中心とする東洋学派と, 欧米留学生を主とする西洋学派とに分れるが, 西洋よりは直接的に, 日本よりは間接的に中国に到来した。社会学という名称と社会学書がまだ出現しない以前に, 孫本文の考証によると 康有為⁽³⁾ (1858—1927) が, 1891 (光緒17) 年に, 広州に長興学舎を創立して, 群学という名称を用い, 学科を創設している。ただし, その来歴と内容は明らかではない。この故に, 龍冠海〔龍冠海, 1964年〕は, 中国社会学の起源を, 1890年前後と想定する。中国語の「社会学」は, 大概, 日本語訳より採

用されたもので, 譚嗣同 (1866—98) の著「仁学」 (1896年) に最初の事例があり, 中国語文の社会学書は, 章炳麟による岸本能武太の「社会学」 (明治31=1898年) の翻訳書が, 1902年に刊行されている。この本は, 中国で最も早い社会学の全訳本である。ついで, 1903年に, 吳建常は, 日本人市川源三による翻訳, F. H. ギディングスの「社会化論」 (Theory of Socialization, 1897) を転訳しており, これは米国社会学書の中国訳の第一冊, 馬君武は, スペンサーの「社会学原理」の2章を訳出している。さらに1911年に, 欧陽鈞は, 日本の遠藤隆吉の講演と著作とを翻訳・編修している。

西洋学派は, 社会学に群学 (羣学) という名称を用いて, 嚴復は, 1897—98年に, ハーバート・スペンサーの「社会学研究」の2章の訳稿を共同経営の上海の新聞「国聞報」に掲載した。黄昭倫〔黄昭倫 1981年〕および彼の説に従う蔡勇美〔蔡勇美 1985年〕は, 1897年を以って中国社会学の発端とする。やがて, 1903年に, 嚴復は, スペンサーの「社会学研究」 (The Study of Sociology, 1873年) の全訳本「羣学肄言」を出版する。費孝通〔費孝通 1948年〕福武直は, この年を以って, 中国社会学の発端とみる。これは, 嚴復その人のもつ学的経歴と学界における地位の重要性と, 嚴復の翻訳著作が「最も成熟し, 最も有名なこと」〔蔡勇美 1985年〕によるものと考えられる。

嚴復は, 最初, 体乾, 後に, 復と名のり, 字を幾道 (嚴幾道先生という), 福建省 閩候の人で, 祖父及び父は医師として著名であった。14歳で父の喪に合い, 馬江船政学堂で, 英文・数学及び自然科学を学ぶ。1875年, 23歳の時イギリスに留学, グリニッチの英国海軍大学に入学, 科学, 建築及び戦術等を学習し, 中西文化の比較や西欧各国の富強の所以を認識したという。1879年, 27歳にして帰国, 馬江船政学堂,

水師学堂を経て、1896年天津俄文館（ロシア語館）総裁に就任。甲午戦争（日清戦争）後、痛心、切齒、著述に従事して、国民を覚醒しようと決心して、西欧諸国の書籍の翻訳と著述に従うこととなる。1898年、ハックスレーの「天演と倫理」（天演論）を出版し、天津に共同事業による新聞「国聞報」を刊行、1902年には編訳館総管に就任する。当時の学界は、新学と旧学（中国伝統の学問）との対立・競争の時代となっていた。1902年に、アダム・スミスの「国富論」（1776年）の翻訳、1903年にスペンサーの訳本「羣学肄言」、J. S. ミルの訳本「群肄権界論」、1904年にジェンクス (E. Jenks) の「社会通詮」、1904年から9年にかけて7巻本のモンテスキューの「法の精神」など社会科学上の名著の翻訳を完成し、さらに、J. S. ミルの「論理学」の前半部を翻訳して、科学方法論への注意を喚起している。1905年、ロンドンで孫文に出会い、中国を救うために、教育上の改革に着手すべきことを語っている。1909年、海軍協都統、文科進士、資政院議員。1912年民国成立後、北京大学校長、袁世凱の顧問参政。1915年袁世凱が帝政復活を企図したとき、これに反対し、以後監視をうけ、閉門謝客。1921年に病により死去、69歳であった。⁽⁴⁾

「羣学肄言」は、1903年5月、上海文明編譯書局より出版、後に、商務印書館から出版される。この書物は、16章、本文365頁、巻末に訳名対照表（26頁）をもち、嚴復の典雅な文言文は、難解で多数の読者を近づけないものがある。にも拘らず、1911年、Y. M. C. A. のバージェス (John Stewart Burgess) が、最も影響をうけた書物を尋ねたとき、学生たちは、スペンサーの「羣学肄言」と、ハックスレーの「天演論」とを挙げたという。この書物が中国の知識人に歓迎された所以を考察すると、まず第一に、嚴復の学問的経歴、科学と技術とを出発点

とした彼の学問が、スペンサーの社会進化論と社会有機体説を容易に受容したことは想像に難くないし、また、イギリス留学、英国海軍大学における勉学を通して、イギリスの政治と民衆を観察して、故国の社会と政治とを深く考えたことと思われる。

嚴復は、「羣学肄言」の序文において、「羣学とは何か、科学の律令を用いて、民羣の変端を察し、以って、既往を明らかにし、方來を測るものである。肄言とは何か、専科の旨趣を發し、功用の施す所を究め、而して、これを示すに、治之方の所以を以てする」と述べ、さらに、「今、士の学を為すや、豈徒らに利禄を以って声誉を釣らんか、將に正徳、利用、厚生 of 三者を一合に有せんとする。羣学者は、將に治乱盛衰之理由を明らかにし、三者のことはその本を扱う」と、社会学（羣学）は、科学の方法を用いて、民衆のもつ障碍を観察し、過去を明らかにし、将来を予測するものと、その学問的性格を規定する。また、「士」の学を為すことは、孔子の「士」が、人民を統治する前に、まず、問題分析を通してから学識を取得し修身するという思想に通ずるものがある。中国古典と外国文献の相容性が、嚴復の特質をなしているが、同時に、それは、嚴復の限界をなすものでもある。

第二に、スペンサーの「社会学研究」の訳書が歓迎されたことは、この書物の成立と論点に由来するところがある。⁽⁵⁾ スペンサーがこの書を執筆するに至ったのは、“Popular Science Monthly”の創立者ニューヨークのヨーマン教授が、1870年春ロンドンにあって、International Scientific Series に1巻を寄稿することをスペンサーに求めたことによる。これは社会学原理（1876—96年）に必要な序説を提示する機会となった。この書物は、16章、本文403頁、「社会の研究」という具体性のものでなく、「社会

科学概説」というべき性格のもので、社会科学（第2章）、その性質（第3章）、その困難性（第4、5、6、7章）、さらに社会研究上の偏倚（Bias）に5章をさき、研究活動、生物学、心理学との関係、結論となっている。

第三に、スペンサーの社会学を通して、厳復は、社会の存続のためには、競争と適応とが必要であることを理解して、中国社会の特質を解釈する新観点を提出していることが挙げられる。これは、中国人のいづく社会観を根本的に変更することを実現せんとするものである。スペンサーの訳著「羣学肄言」と、ハックスレーの「天演論」は、新しい思想を到来して、20世紀初頭の中国の知識人を震撼した。スペンサーの訳者厳復は、社会ダーウィン主義（社会达尔文学説）の普及に深大な影響を及ぼしたと考えられている〔黄昭倫，1981年〕。毛沢東は、湖南省図書館において、厳復の訳書を半年間自習しているし、魯迅は19歳の少年のとき、中文版の「天演論」をよみふけているし、胡適は、社会ダーウィン主義が民衆の思想に影響したことを生々と回想している。

厳復は「近代中国思想史上に崇高な声誉を享有」しており、彼は、直接的に西洋文化と接触した中国人の先駆者であり、西洋思想に対する強烈な関心とともに、伝統的な中国の価値観に対しても濃厚な感情を保存しつつづけている。当時の中国における伝統派と改革派との激しい矛盾と相剋の中で、一つの結節点を求めつづけた歴史の転換期の人物とみることができる。

2

西洋の社会学書を受容を経ながら、中国の社会学は、1912年の民国成立後の20年間、欧米諸国とくに米国のキリスト教会の活動が活発化して、文化上の治外法権をもつ宣教師あるいは社会学者（中国当局の管理をうけない）が、社会

学の講義をはじめ、「教会大学は、原来中国社会学の温床」〔費孝通 1948年〕となった。

1912年（民国元年）以前に、羣学を設置した学校は、長興学舎の外に長沙の時務学堂、「社会学」課程を設置したものは、京師法政学堂（1906年）、上海南洋公学、天津頭二等学堂及び上海セント・ジョーンズ大学にすぎなかったが、それ以後、北京大学（1912年、1917年正式開講）、滬江大学（1913年）、清華大学（1917年）、燕京大学、南京高等師範、厦門大学、复旦大学及び金陵大学が相ついで、社会学課程を設けている。1910年代は、社会学系（日本の学部と学科の中間的規模、通常、学部と訳す）を設置するものは比較的少数であったが、その後大きく増加して、1930年までに全国の大学に設立された社会学系は11校（滬江、燕京、齐鲁、清華、复旦、厦門、中央、光華、金陵、河南及び北京師範）、この外、社会学と歴史学合設学系2校、社会学と政治学合設学系2校、社会学と人類学合設学系1校となっている。米国との関係を見ると、燕京大学の社会学系は1924年に開始されたが、プリンストン大学から毎年交替で2名の社会学者の派遣をうけているし、プリンストン大学は、1906年に、プリンストン＝北京センター（1923年、燕京大学内に移転）、上海の滬江大学（創立時、上海浸礼学院という）は、中国の法律によるよりも、米国のヴァージニア州の法律によって設立されており、また、燕京大学は、プリンストン大学との協力と共に、ハーバード大学と協力関係を結び、1925年には、ハーバード＝燕京学社を設置して、ロックフェラー財団からの資金協力を得ている。また、米国は、清朝よりの庚子賠款（義和団の乱、明治33（1900）年）の償金を返却して、清華学院（のちに、清華大学）を創立し、評価の高い社会学系が設置されている。また、償金の一部は中国人留学生の経費の支弁に向けられている。

1925年在華キリスト教大学の社会学

		提 供 し た 講 座 数	半学期で提供 した単位数
滬 江 大 学	Shanghai College	6	18
聖 約 翰 大 学	St. John's University	2	—
金 陵 大 学	Nanking University	8	40
福 建 協 和 大 学	Fukien Christian University	2	9
杭 州 之 江 大 学	Hangchow Christian University	2	9
山 東 齊 魯 大 学	Shangtung Christian University	11	26
長 沙 雅 礼 大 学	Yale in China	5	21
金陵女子文理学院	Ginling-College.	3	112
広 東 嶺 南 大 学	Canton Christian College.	6	18
燕 京 大 学	Yenching University	31	102

(J. S. Burgess)

国立大学は、社会学に対する関心が低く、キリスト教系大学と対照的であるが、呉淞政治大学(The National Institute of Political Science)には、一個独立の社会学系が設置されている。

キリスト教系大学の教師は、殆んど米国人で、宗教的教養を身につけているが、彼等の中で、とくに、バージェス(John Stewart Burgess, 1883—1949)は、著名である。バージェスは、中国における社会調査の先駆者の1人となっている。キリスト教系大学の発展の中で、社会調査の方法研究と現地調査の実施が、この時期の特色となる。しかし、これは、中国へのキリスト教の布教をめざして、中国の伝統価値と社会秩序を、社会学の観点から調査研究し、それらの人民に対する影響をゆるめることと、布教を開拓することをめざしたもので、慈善事業、社会事業の為の社会実験区の調査の発展が中心となる。1914—15年間、北京で、キリスト教系の社会改良協会が、302人の洋車夫調査を実施し、1917年には清華大学のアメリカ人教授の指導で、195戸の農家の生活調査、1918—19

年間、アメリカ人宣教師ガンブル(Sydney, D. Gamble)と燕京大学社会学教授バージェスの指導の下で社会生活についての共同調査が実施され、その成果は、1921年に英文報告書「北京——一個社会調査」として発表されている。同年、滬江大学社会学教授カルプ(D. Kulp)が、学生を指導して、広東潮州鳳凰村で現地調査を実施してその成果は英文書「華南農村生活」として刊行されている。

1926年、中華教育文化基金会は、社会調査部を設立、中国人による調査事業の発展を促進することになったが、2年後、国立中央研究院社会研究所に合併して、社会調査活動に大きな影響を及ぼしている。1920年代に出版された著明な調査研究には、上海の滬江大学勃朗社会学院「社会調査—沈家行実況」(商務印書館刊, 1924)は、中国人の研究組織が、実地調査を実施した最初の中国文の書物として、特筆されている。また、梁啓超と陶孟和の「Village and Town Life in China」(1922)や、李景漢「北平郊外之鄉村調査」(1930年)、南京金陵大学米人教授バック(John Lossing Buck)の「中国農家経

済」(1930年)、陶孟和「北平生活費之分析」(1930年)、燕京大学社会学系「清河鎮調査」(英文, Ching Ho, A Sociological Survey)などがある。

この教会大学の社会学は、一方において、顕著ないくつかの問題点をもっていた。第一は、教会大学の社会学系、社会学課程で使用されるテキストは、殆んど米国で出版されたもので、中国の国情に應ずるように改訂されておらず、また、中国人学生にとっては言語の障碍が残った。第二は、彼等の実施した社会調査は、一貫した理論的背景を欠き、その成果は、静態的なものであった。大多数の宣教師は、貿易港に居住していて、そこの社会環境は、社会調査の対象が山積して、多数の調査が実施されたが、それらは、实际的なもので、理論的関心に基づくものではなかった。しかし、中国人学生に社会学に対する関心を喚起したこと、欧米諸国への留学生を送り出し何人かの専門社会学者を育成したことなどの結果が挙げられている。社会学専攻の留学生は、1914年に7名、1920—21年に19名、1927年に27名が出国しているが、全中国人留学生中にしめる比率は少ない。留学生出身の社会学者には、東京高等師範学校で学んだのち、ロンドン大学で研究した、陶孟和(1887—1960)は、パリとロンドンに学んで、デュルケイムの「社会学方法論」を翻訳し、さらに、「哲学の貧困」を翻訳している。マルクス主義知識人の大多数は、日本で教育を受けた者で、社会学専攻者は殆んどいない。例えば、東京帝国大学で鉱山学と冶金学を学んだ李達(1890—1966)は、マルクスの「資本論」「経済学批判要綱」をはじめ多数のマルクス主義文献の翻訳を残している〔黄昭倫, 1981〕。この期を代表するものは、燕京大学社会学系であり、ガンブルとバージェスの「北京」社会調査と考えられている。

なお、この時期、1919年5月4日に、「五四運動」⁽⁶⁾とよばれる反軍閥と反帝国主義を核心とする青年学生の反日示威請願(反日デモ)が発生したが、結果としては、表面上、文学の改革に終って社会学と社会主義は、分離した路を歩くことになったこと、さらに「中国社会性質」⁽⁷⁾に関するマルクス主義者による「社会史論戦」(1928—37)が惹起されたことなど、語るべき多くの事柄があるが、別の機会に述べることにする。

3

1920年代後半以降、教会関係者が社会学の教授と研究に従事していた段階を打破して、国外に留学していた中国人研究者が帰国して、社会学の研究活動に従事をはじめた。社会学の中国化ないし本土化の時期であって、中国人社会学者が、欧米の社会科学の研究方法を以って、中国社会の調査、研究を実際にすすめて、社会学は、段々に成熟していき、模倣から中国化が標榜される。今日に伝えられる著名な研究活動は、すべてこの時期に成立したものである。この時期を代表する社会学者には、許仕廉、李景漢、孫本文、呉文藻、費孝通などが活躍している。

1924年、燕京大学社会学系が開始された以後、許仕廉は社会学原理を講義し、前北京大学社会調査所長の陶孟和、李景漢(1898—)、呉文藻(1901—死去)、朱積中、朱友漁等は、すべて、社会学系に参加している。李景漢は、燕京大学の学生とともに実施した「北京郊外之鄉村調査」(1930年)のあと、さらに、有名な「定県社会概況調査」(1933年)、「実地社会調査法」(1933年)などの業績が残されている。孫本文(1891—1979)は、「旧中国社会学の開創性人物の1人」と称せられる社会学者で、江蘇省呉江の人、国立北京大学にて2年間、康宝

忠教授（中国の大学で社会学を講義した最初の人物）の社会学課程を受けたあと、1921年渡米して、イリノイ、コロンビア、ニューヨークの各大学で勉学し、1925年ニューヨーク大学で博士号を得ている。彼は、帰国後、1927年、米国新興の文化学説、W. F. オグバーン、W. I. トマスの理論を、第1著作「社会学上の文化論」として刊行する。1930年に、「中国社会学社」⁽⁸⁾（中国社会学会）が結成されると、何回も会長（主席）として選任され、刊行物の総編集をも兼任した。その「社会学原理」（1935）は、大学標準教科書として採用され、1949年までに11版を刊行しており、その「近代社会学発展史」（1947）、「當代中国社会学」（1948）は、現代社会学の各学派を論述して、彼が、欧米の新潮流と中国の社会学の発展に注目していることを示している。⁽⁹⁾

費孝通は、今日国際社会学界で著名で、高い尊敬をうけている社会学者である。筆者は、1982年3月東京と北京で、1984年12月東京で、三度面会する機会をもち、署名入りの著書「社会学的探索」（1984年5月第1版 天津人民出版社刊）を贈られたこともあって、最も親近感のもてる社会学者である。費孝通は、1910年、江蘇省呉江県に、父及び姉が、日本に留学したことのある家庭に生れる。燕京大学社会学系、清華大学大学院及びロンドン大学に社会学、人類学を学び、現在、中国社会科学院社会学研究所名誉所長、中国社会学会会長、北京大学名誉教授、中国民主同盟中央委員会副主席の役職にある。1981年11月18日、費孝通は、英国王立人類学会より、1981年度ハックスレー賞（赫胥黎奨章）を受けている。ロンドン大学において、マリノフスキーに社会人類学を学び、故郷の江蘇省呉江県開弦弓村（学名、江村）の農村調査による「Peasant Life in China」（中文名「江村経済」、1939、1980年第4刷）は、亡妻王同

恵に捧げられ、マリノフスキー教授の序文が掲載されている。費孝通は、34冊に及ぶ著作のある“多作の研究者”であるが、とくに、日本の研究者には、1948年の日本社会学会年報に寄せられた論文「中国社会学の発展」（社会学研究第1巻第3集、1948年）は、新中国成立の前年という時期でもあり、重要な意義をもつものと考えられる。

費孝通は、中国社会学の発展を三段階に区分して説明するとともに、社会学と社会主義との関係について重要な問題を提議している。「五四運動においては、人生と社会にたいし新しい理想がかゝげられた。……その当時、社会科学と社会主義の区別は、人々に注意されなかった。両者の区別は、実質上からいうと非常に顕著だとはいえない。科学は実用から離れてあり得ない。それは自然科学において疑問の余地のないことである」、「社会主義は、ある一つの社会理想によって定められた実践の道であり、社会科学と相互に排斥するものではなく、事実上では相互に補足するものである。もしどうしても区別しなければならぬというならば、ただ態度の上に差別があるだけとわたしは考える」、「社会科学は批判的であり、社会主義は戦闘的である。社会科学の現実にたいする態度は思考及び解釈であるが、社会主義の現実に対する態度は変革及び推進である」、したがって、「社会科学と社会主義は、人類生活の改造進歩にあたって互に相協力すべきものであるが、激烈なる社会的変遷の過程にあつては、道を別って進むこともある」、それ故に、「社会科学は、実用的価値を有するものであると信ずるわれわれのような者から見れば、もし中国の社会学が今少し早く成熟していたならば、変遷の過程に支払った不必要な代価を多少は減少することができたと思われる。わたしは個人としては、社会学が社会主義に代替しうるものであるとは考えな

い。がしかし、わたしは社会学が社会設計に寄与するものである」ことを確信すると述べている。社会学と社会主義との関係は、今日においても依然として論議される問題である。

その後、費孝通は、「大学的改造」(1950)を著作し、その一部は、「社会学評論」(1954年)に紹介されているが、その当時は、すでに、1953年以降社会学の学生は採用されなくなっており、1952年で社会学教育は中断されて、1979年3月まで、社会学は、廃学となっていたのである。社会学の恢復後、費孝通は、社会学の講義や社会調査法の指導とともに、中国の人口問題の解決のための人口再配置策としての小城镇(小都市)建設と、少数民族地区の発展にとりくんでいる。

1930年代の中国社会学は、中国化への努力の進む時期(1930—36)から、挫折していく時期(1937—48)、低落していく時期(1949—52)へと変遷する。1930年代に、中国内部における社会学に対する理解の不足—内容空疎な、非実際的な学問とみる—と、1937年以降の日本軍の華北、華東及び華南地区占領の影響により大学は西遷し、少数の社会学系は活動停止あるいは範囲を縮小して、社会学の発展は挫折する。1930年代初頭からの社会学者による「社区研究」(コミュニティ研究)の提唱は、日本軍の進攻に際して、「戦時の中国社会学の共同の風潮」となり、とくに、現地での社区研究を進める3つの研究機関として、昆明の清华大学国情普查研究所。雲南大学と燕京大学の共同の社会学研究室、費孝通は、ここの研究室において、恩師呉文藻と昆明その周辺及び辺境地区の調査研究を行った。さらに、華西大学の辺疆研究所がある。当時、清华大学は、北京大学や南开大学とともに西南連合大学を構成していた。抗戦は、「嘗ては門戸を閉ざし、森厳なりし大学を後方の郷村のなかに疏散」し、「国家の危

急と実際問題の深刻さは、彼らをして現実を正視せざるを得なくし、彼らの多年習熟した理論は現実の人民の生活のなかで実証することを求められ、そしてそれは否定せられた」〔費孝通1948〕という。

1930年以降の社会学教育の拡大は、1934年に17か所の大学、学院が社会学系をもち、社会学専攻の学生数は483名、全大学生の7%に及んでいる。1938年には、中央政府教育部(文部省)は、大学課程を頒布して、社会学を、文学・理学・法学・教育の学部において、社会科学類共同必修科目の一つと規定し、1939年には、文化人類学と人類学、辺疆社区研究とが、共に研究科目として規定されている。1940年に中央政府社会部(厚生省)が設立されると、各大学社会学系は、社会政策、社会行政体制及び社会福祉活動に直接、間接に連携をもつこととなる。かかる社会学発展の趨勢も、1937年以降の日本軍の進攻によって挫折にいたるのである。

1947年秋、全国の大学、独立学院で社会学系を設置するもの19校——1934年17校——、すなわち、中央、清華、中山、復旦、雲南、金陵、燕京、滬江、嶺南、華西、東呉、光華、輔仁、震旦、珠海、の各大学、金陵女子、広東法商、郷村建設、広州法学などの学院(単科大学)である。

1948年中国大学の社会学開設状況

大学類別	大学・学院数	社会学系	社会学課程	教師数
国立と省立	31	7	6	47
私立	18	14	1	72
総計	49	21	7	119

〔黄昭倫 p. 192〕

これは、新中国の成立(1949年)の前年の状況であって、約半世紀に及ぶ中国社会学の努力の成果とみることができる。しかし、1934年

(1936年教育部統計)においては、大学類別、国立と省立21校、私立20校、社会学系17校に比較すると、この間(1934—48年)に、私立大学が2校減少し、社会学系は4校増加したにすぎない。

19世紀末に社会学が紹介されて、真正な発展段階に入るのは、1920年代以降、約30年間であるが、その間、中国は患難に遭遇して、その発展は、一帆風順とはいかず、挫折に到るのであるが、その間のいくつかの顕著な特徴をあげると、つぎの諸点が指摘される。

第一に、社会学は、教会大学あるいは私立大学において発展してきて、社会学系は、まず、教会大学に設立されており、その後の社会学系は、国立大学よりも私立大学に重点がおかれてきている。

第二に、米国およびアメリカ社会学の影響が最も大きいこと、これは、世界におけるアメリカ社会学の発展とその学問的重要性、社会学系の設置されている教会大学は、殆ど米国系であること、社会学の教授の多数は、米国留学出身者であることに依っている。米国から来華した著名な社会学者には、D. Kulp, J. S. Burgess, John Lossing Buck, さらに、1930年代以降の短期来華者には、C. G. Seligman, Robert Ezra Park, Richard Henry Tawney, Wilhelm Schmidt, Karl A. Wittfogel, Leslie White, B. W. Aginsky, Reo Fortune, T. L. Smith らが、中日戦争がなければ、B. K. Malinowski, R. Firth, Edward Sapir の来華も、彼等の合意の通りに実現したと思われる。

第三に、中国の社会学関係文献の約4分の1を翻訳書がしめていることである。1920年以前においては、中国人の編著に比して翻訳書は一倍以上の多数に上っている。翻訳書は、必ずしも重要著作ばかりでなく、訳文も流利暢達を欠くものがあり、また、中国人の通例として、原

文を忠実に翻訳してその文意を伝えることよりも、中国文としての訳文の文章作法(語彙が、音訳される場合、意識される場合など)に凝ることが多い。一度、翻訳が完成すると、原典研究を顧みない場合もある。これは中国人の伝統的な外来文化に対する態度であるが、社会学文献の精密な研究には、かかる態度は速に放棄されなければならないところである。

第四に、1920年代以降、中国の社会学者は、自国の社会の社会調査と社会問題の研究を重視しはじめて、とくに、人口、農村・家族組織・労働者生活及び辺疆社会について多数の調査と研究が実施され、その成果は、約300冊に及ぶ主要な社会学文献の約3分の1に及んでいる。尤も、その数の多数にも拘らず、社会学的概念に立っての比較研究、応用研究は必ずしも多数ではなく、教学上に利用されるところが少ないのは、一個の欠点である。

4

1952年に社会学教育が停止され廃学となつて、10年に及ぶ文化大革命(1966—76)の嵐がすぎ去った後、1978年12月の第11期三中全会(第3回中央委員総会)を経て、1979年3月15日から18日にかけて北京で、中国社会学研究会が結成されて、社会学は恢復した。席上、中国社会科学院の院長胡喬木は、「社会学が一つの科学であることを否定し、粗暴なやり方でこの科学の存在と発展を禁止したのは誤りであった」と指摘し、「史的唯物論が各種の社会科学に完全に代替するものでは決してない」こと、「社会学にとっては、研究することが沢山ある。実際的な問題も研究すると同時に理論的な問題も研究すべきであり、わが国が当面している社会問題を研究するとともに、外国の社会問題も研究すべきである。ただし、研究課題の切実性からみれば、実際的な研究が一層重要である」

〔福武 直 1979年〕と述べたという。

1980年5月4日の光明日報は、袁緝輝（上海市，復旦大学社会学主任）と劉柄福の論文「什麼是社会学」（社会学とは何か）を掲載して、「現在，中国社会内部には各種各様の矛盾が存在する。それはわが中国の各種の社会問題の表現である。例えば，家庭・人口・青年・老人・就業・住宅などの問題である。社会科学工作者の任務は，研究を通じて社会現象と社会問題の発展規律をあばき出し，実際の科学的方法を提出して，関係部門の参考に供し，これら社会問題を解決して4つの現代化実現に奉仕することである。社会学と他の社会科学との関係は相互に依存・連携・包摂し合い，互に重要な関係を持っている。社会現象の研究ではそれぞれ各学科毎に区別があると同時に相互に相通じた要素がある。経済学は経済構造の研究を行うが，経済的角度から人口問題を研究する。社会学は社会構造を研究し，社会構造の角度から人口問題を研究する⁽¹⁰⁾」と述べている。

1982年3月29日(月)，われわれ，日本社会学会有志訪中団は，北京市東城区，中国社会科学院の社会学研究所を訪問した。当時の研究所長費孝通の歓迎の辞のあと，社会学研究所副主任は，研究方針として，(1)マルクス主義を中国の事情と結びつけて，中国独得の社会学を建設する，(2)マルクス主義を以って，社会学に取り替えることはできない，(3)従来の研究成果を否定，排斥することはしない，旨の宣明を行い，社会学研究所の当面する研究課題として，(1)人口問題，都市の構造との関連で，人口の再配置，人口問題の解決に努力する。(2)家庭・婚姻問題，東洋の家族の構造と西洋のそれとは異なるから，現代化をいそぐ中で，伝統をうけて，よい家庭を如何にくみ立てていくかを検討する，(3)少数民族 かれらの文化・その特性を研究するとともに，少数民族の居住地区の発展を

図り，人口問題の解決に資する，ことが述べられた。社会学研究所は，全中国の社会学研究の方針の策定・教材の研究，研究人員の養成と配置などを担当している機関と考えられる。

かかる研究方針のもとで，1980年6月，復旦大学分校々長王中教授の指導下に，社会学系の袁緝輝，劉柄福，龐樹奇の選編による「社会学文选」が編修され，1981年1月，浙江人民出版社から出版された。この書物は，社会学恢復後，最初の書と想定されるもので，B6判形，313頁の小型本で，最初に中国社会科学院副院长干光遠の1979年7月29日，「上海市社会学会成立大会上の講話」が掲げられ，「哲学研究」誌<評論員>，費孝通など10種の論考と，香港大学社会学系講師黄昭倫〔1981年〕の論文，さらに，ソ連・フランス・日本（世界大百科辞典）の百科辞典の<社会学>項目の翻訳，英国のT・B・鮑陀摩の「社会之研究」の翻訳と巻末に人名索引が付されている。これが，社会学恢復時における中国社会学の状況と思われる。その後，1984年8月，「社会学概論」（試講本）が，天津人民出版社から出版されているが，この書は，テキスト版で学会で討論を重ねた上で出版することとされ，市販されてはいるが，いまだ東京・北京でも容易に入手できない。上海社会学会々長曹漫之の説明（1985年2月19日）によると，1986年に「中国社会学概論」10数巻が出版されるとのことである。

1979年以降の経済開放政策とともに理論面についても大胆な改革が進められて，1985年2月1日の人民日報における「紅旗」論文の紹介について，4月1日から5日に至る「社会学と社会改革」理論討論会は，探討を終了してつぎの結論を総括している。

1. 中国社会学の発展はすでに新歴史段階に進入している。世界の社会学は，急速な発展をとげており，中国は，経済体制の改革が進行し

ていて、当然、労働方式、生活方式及び思考方式に変化が生起して、実質上、一場の経済改革を以って、突破口の全面的社会改革がおこされんとしている。これは、科学思想の指導の下で一場の社会実験を試みようとするものと見做すことができる。社会諸科学の指導と援助とが要請されるが、とくに、社会学に求められるところは大きく、「中国社会学は、その恢復段階から、現在は、新たな歴史段階に入りつつある」と考えられて、社会学理論、方法、応用等の研究工作进行をさせて、中国の社会学を堅実な基礎の上に振興すべきものとする。

2. 中国社会学は発展を要し、全面改革を必須とする。才能を経済改革と社会改革との需要に適應させて、中国社会学と現代社会学との距離を短縮することを可能としたい。

- (1) 思想上と学風上で一つの変革が必要である。思想の解放は、社会学の発展の先驅をなす。
- (2) 歴史唯物主義と社会学間の関係を、継続的に糾纏する必要はない。
- (3) 社会学研究者は、当然、社会改革の現状を反映すべきである。社会改革理論を研究し、社会改革を研究する中にいくつかの問題が出現し、あるいは出現する可能性がある。社会発展を計画的にする活動に参加すべきである。社会学研究者は、教育、研究、宣伝、諮問など多様な形式を通じて積極的に社会改革を行うべきである。
- (4) 理論研究と応用研究は相互に依存的関係にあり、両者を同時に行うべきである。
- (5) 社会学方法と方法論研究を加強する必要がある。
- (6) 社会学の教育と研究の隊列（人材養成と活動）は、社会学の発展に決定的作用をもつ。
- (7) 社会学の研究の特別の観点とわが国の社

会学研究の現状からいうと、社会学研究組織活動は非常に重要な問題点である。⁽¹¹⁾

これは、高度の政治文件であり、対外的なものであるが、しかし新しい社会学の宣言とみることができる。今後この方針が、着実に実行されるのか、一片の宣言として終わるのかは、その推移をみなければ判らないが、しかし、そこには、新たな胎動のあることは確実なことである。現在、30余名の留学生が、米国で社会学を研究しており、彼等の今後の活躍と、現代化への寄与が一つの焦点となる。さらに、1985年12月10日、「北京周報」（日文版）は、論文「中国経済学研究の十大変化」を発表し、当面する経済学研究の重点の諸問題（社会的生産力の発展、国民の富の増大、経済の安定成長と発展、社会主義経済の順調な促進など）についての既成の解答は、「資本論」のなかには見い出せないとし、三千年来の解釈と訓詁の学からの大転換、定性分析から定量分析を重視すべきことを主張している。⁽¹²⁾社会学と経済学の新しい段階は如何に進展していくものか、史上、自らの文明を構築しえた大民族の熟慮の判断なのであろうか、今後の推移を慎重に見守る必要があるものとする。

1986年1月17日記

註

- (1) 「社会」（社会学雑誌）1985年第3期，1985年6月20日発行，p. 63～64。
- (2) 齊藤正二著「日本社会学成立史の研究」1976年，第4章「スペンサー社会学の流入とその文献的研究」。
- (3) 孫本文著「當代中国社会学」1948（民国37）年。
- (4) ①孫以芳「清末社会学萌芽期」，中国社会学史資料，「社会」（社会学雑誌），1985年第3期，p. 62。及び②黃昭編〔1981年〕
- (5) Herbert Spencer, *The Rtdy of Sociology*, 1873.
- (6) 汪業祖編「五四研究論文集」1979年5月，聯經

出版事業公司。

(7) 鄭学稼著「社会史論戦簡史」1978年11月、黎明文化事業股分公司。

(8) 孫本文らの中国社会学社(1930~1948)は、6巻の刊行物「社会学刊」を刊行し、9回の年会(年次大会)を開催している。第1回大会、1930年、上海、「中国人口問題」。第2回大会、1932年北京、「家庭社会学」。第3回大会、1933年南京、不詳。第4回大会、1934年北京、不詳。第5回大会、1935年南京、「社会計画」(社会規制)。第6回大会、1937年上海、研究報告。第7回大会、1943年重慶、昆明、成都、「戦後社会建設」。第8回大会、南京、北京、広州、成都、「中国社会学今後発展應取之途徑」。第9回大会、1948年、南京、北京、広州、成都、「二十年來之社会学」〔黄昭倫1981年〕

(9) 許妙發「孫本文、旧中国社会学界の作用と影響を論ず」「社会」(社会学雑誌)、1984年第1期。

(10) 清水徳蔵「中国の社会」福永安祥編「現代アジア社会の研究」p. 54~55, 1984年。

(11) 「社会」(社会学雑誌)1985年第3期 1985年6月20日出版, p. 63~64。

(12) 「中国における経済学の十大転換」の掲げる10の項目は次の通りである。

- ① 経済学の批判から建設へ
- ② 経済政策の理解の解明から科学的分析へ
- ③ 近代西側経済学の排斥、否定から分析、参考へ
- ④ 生産関係の研究から生産力およびその生産関係との相互作用メカニズムの研究へ
- ⑤ 経済関係の一般的研究から経済運営メカニズムの具体的研究へ
- ⑥ 経済の定性分析から定量分析へ
- ⑦ 理論経済学から応用経済学へ
- ⑧ ミクロ経済からマクロ経済へ、短期計画から長期戦略研究へ
- ⑨ 孤立した単一の経済学研究から総合的多学科の社会経済研究へ
- ⑩ 線型知識構造から複合型知識構造へ

参考文献

一、中国社会学史関係文献

(1) 費孝通 ①「中国社会学の発展」社会学研

究第1巻第3集, 1948年 p. 177~189 ②「社会学学科をどう改造するか」「社会学評論」第5巻第1号 1954年 p. 89~97。

(2) 孫以芳 「中国社会学史資料」「社会」(社会学雑誌)1985年第1期より連載。

(3) 龍冠海 ①「社会学與社会問題論叢」1964年正中書局, p. 79~96; ②「社会学」1964年 三民書局 p. 337~413。

(4) 楊懋春 「現代社会学説」1981年 黎明文化事業股分公司 p. 584~600。

(5) 黄昭倫 ①「中国解放前の社会学的成長」。「社会学文選」掲載, 1981年。p. 173~208。

② Wong, Siu-lun, *Sociology and Socialism in Contemporary China*, London: Routledge & Kegan Paul, 1979。

(6) 蔡勇美 ①「1984年以来の大陸社会学の発展と未来展望」雑誌「中国論壇」, 1985年10月号 p. 105~117 ②蔡勇美和蕭新煌編「社会学中国化——地方学人観」, 台北, 巨流圖書公司, 1986年10月。

(7) Maurice Freedman, ①Sociology in and of China, *British Journal of Sociology*, Vol. 13, p. 106~116. 1962. ②The Study of Chinese Society, 1979. p. 373~379。

(8) 福武直 ①「中国の社会学とその復活」「社会学評論」第30巻第2号(118)1979年9月 p. 60~67。②「中国社会学の復活と現況」「日中経済協会報」第108号, 日中経済協会, 1982年, p. 43。

(9) 田辺義明 「黎明期の中国社会学」日本社会学史学会編, 「社会学史研究」第5号, 1983年, p. 63~73。

二、中国社会学関係文献

(1) 嚴復 「羣学肆言」, 1970年, 人人文庫 台湾商務印書館。

(2) 复旦大学分校社会学系編「社会学系編社会学文選」浙江人民出版社, 1981年1月。

(3) 費孝通, 「社会学的探索」天津人民出版社, 1984年6月第1版。

(4) 費孝通, 横山廣子訳「生育制度」1985年, 東京大学出版会。

(ふくなが やすよし, 本学学科主任教授)